

經營における共同體と分業

——ニックリツシュ經營學說の一考察——

藤 津 清 治

目 次

- 一 序
- 二 經營における共同體
- 三 經營における分業と共同體
- 四 目的指定の法則と一體化・肢體化の法則
- 五 共同體化と分業的生産の高度化
- 六 結

一 序

ニックリツシュ (Heinrich Nicksch) の經營學說は共同體理論をその出發點とし、共同體理論がその全體系の基
經營における共同體と分業

礎をなしているといわれる。そしてまた、彼の意圖もこうしたところにあつたことは、その諸著書・論文から容易にうかがえるところである。しかし、彼の共同體理論を、その出發點にたちかえつて、人間存在の問題から解釋していく場合、はたして、彼の意圖は妥當であるといえられるであらうか。これに對しては、多くの疑問をもたざるをえない。彼の理論が難解であるとせられる主な理由の一つも、こうしたことと關連するのではないであらうか。ところで、彼の共同體理論は、これを單獨にはなく、分業ないし分業・協業に關する所説との關連において考察することによつて、より明確に把握せられうるものと考えられる。それゆえ、こうした考察方法をとることによつて、彼の共同體理論のみならず、いわゆる分業に關する所説をも明らかにし、さらにすすんで、これらを批判的に檢討することとしたい。これが本稿の課題である。なお、本稿において參照する彼の著書はつぎの二つである。

H. Nicklisch: Der Weg aufwärts! Organisation, Versuch einer Grundlegung, 2. neu bearbeitete Aufl., Stuttgart, 1922.

——: Grundfragen für die Betriebswirtschaft, Stuttgart, 1928.

二 經營における共同體

ニックリッシュによれば、經營はその構成員の消費欲求を直接に充足するためではなくて、市場に對して財を生産する。すなわち、商品を生産する。經營はこうした商品の生産を通じて貨幣を獲得し、その構成員は生産した商品に對する分け前を貨幣で受取る。つまり、構成員の消費欲求は、商品の生産に對しては間接的にのみ關係する。こう

した意味において、經營における商品の生産と直接的に關連する構成員の欲求は、貨幣を獲得せんとする欲求として解せられる。そして、それは、構成員の消費欲求から派生した欲求にほかならない。それゆえ、經營の目的も、こうした派生的欲求と關連する。すなわち、それは、生産した商品の對價としての貨幣を獲得し、これによつて構成員の派生的欲求を充足することにあるものと解せられる。そして、經營は、こうした目的をもつ持續的存在をなすのである。⁽¹⁾

さて、經營における共同體の問題は、こうした經營の目的と關連し、しかも、それは、經營社會とその構成員との關係の問題である。ところで、ニククリッシュは、共同體の問題を、ただちに經營について論ずるのではなくて、まず社會一般と個人との關係の問題として展開する。すなわち、共同體一般の問題としてのべている。それゆえ、われわれもまた、共同體一般に關する彼の所説から考察することしよう。ところで、共同體一般に關するニククリッシュの論述は、人間存在の問題と不可分の關連において展開せられている。そして、こうした問題の第一は、人間の存在性格とこれに關する意識の問題であり、第二は、こうした意識にもとづく人間行動 (mensches Handeln) の性格の問題である。つまり、ニククリッシュにおいては、これら二つの問題のうちに、共同體の問題が展開せられているわけである。まず、第一の問題から順次考察し、彼の共同體に關する見解を明らかにすることしよう。

さて、ニククリッシュは、人間の存在性格とこれに關する意識について、一つの命題を措定する。すなわち、彼によれば、人間は精神 (Geist) である。人間はその良心 (Gewissen) において、あらゆる人間が精神であり、それゆえ、一樣であること、すなわち、あらゆる人間が無差別に人類 (Menschheit) であることを意識している。そして、

こうした意識があらゆる人間においてその程度をことにし、また、それを失つてしまつた人間が多數存在するとしても、このことは、こうした命題の眞實性を變えるものではないのである。⁽²⁾

ところで、彼はさらに、こうした命題から、第二の命題を措定する。すなわち、彼によれば、人間はその良心において、自分自身が人類と結ばれていることを知っており、また、人類を通して自分と他のあらゆる人間とが結ばれていることを知っている。換言すれば、第二命題においては、人間はその良心において、自分の存在 (menschliches Sein) についで、自らが一つの全體 (ein Ganzes, ein Ganze) としてただちに人類をなすことと、自分をふくむ一つのより大きな全體 (ein größeres Ganze) とつた人類の一肢體 (ein Glied) をなすこととを、同時に理解しているのである。⁽³⁾

ところで、これら二つの命題の關連は、どのように理解せられうるであらうか。こうした問題を考察することによつて、われわれは、人間の存在性格に關するニククリッシュの見解を、明らかにすることができようであらう。

さて、第一の問題は、第一命題の「人類」がいかにして第二命題の二つの「人類」となるか、に關するものである。ニククリッシュによれば、人間は精神であることによつて、他の諸物から區別せられる。⁽⁴⁾そして、彼があげる第一命題は、このことと關連するものと解せられる。すなわち、人間は精神であることによつて他の諸物から區別せられ、こうした區別に關するかぎりにおいて、あらゆる人間は一樣に、無差別に「人類」なのである。つまり、こうした「人類」は、人間集團としての「人類」ではなくて、人間を他の諸物から區別する場合の「人間であること」の意味における人類である。それゆえ、あらゆる人間は、「人間であること」において他の諸物から區別せられ、そのかぎり

において一樣無差別なのである。ところで、第二命題は、人間と他の諸物との區別の問題と關連するのではなくて、人間相互の關係の問題と關連するものと解せられる。そして、第一命題の「人間であること」ないし「人類」は、第二命題においては、各人が「一つの全體」をなす意味における「人類」と、各人をそのうちにふく「一つのより大きい全體」の意味における「人類」との二種になるものと解することができる。すなわち、第一命題における「人類」は、第二命題においては、一方、すべての人間がそれぞれ一樣に一つの全體をなす意味において、各人を「人類」たらしめると同時に、また他方、すべての人間の相互の結びつきによつて社會が成立し、社會がより大きい全體をなす意味において、社會を人類たらしめるのである。

さて、二つの命題の關連について、第二にとりあげるべき問題は、「人類としての一つのより大きい全體の肢體」という表現における、「一つのより大きい全體」とその「肢體」との關連に關するものである。こうした問題は、これら二つが相互に一方が他方を前提することによつてのみ可能であるという、相互前提的關連をもつということによつて盡されるであらう。ただし、すでに第二命題において考察したごとく、兩者は、第一命題の「人類」を通して人間が他のあらゆる人間と結ばれるという、同一事態から生ずるものにほかならないからである。

第三の問題は、「一つの全體」としての人類、「一つのより大きい全體」としての人類、および「肢體」の三つが、その相互關係においてもつ意味に關する。さて、人間が一つの全體であると同時に、一つのより大きい全體の肢體であるということは、人間存在の社會的な性格を意味する。そして、社會が一つのより大きい全體としての人類であるということは、それが、こうした人間存在の性格に關する一つの屬性をなすことを意味する。それゆえ、第二命題に

おける二つの「人類」もまた、ともに、人間の存在性格に關して理解せられる、それぞれ別個の屬性をなすものであることが注意せられねばならない。ところで、これら三つは、ニックリッシュのそれらに關する別の表現によつて、それらのもつ意味をより明らかにせられるであろう。すなわち、各人が「一つの全體」をなす意味における人類に對しては「個體性」(Einzelheit)⁽⁶⁾、より大きい全體の「一肢體」に對しては「肢體性」(Gliedschaft)⁽⁶⁾、「一つのより大きい全體」としての人類に對しては「全體性」(Ganzheit)⁽⁷⁾という表現がこれである。ところで、なおこの場合、肢體性と全體性とは、それが同一事態に關する別の見地よりの規定であることが注意せられねばならない。そして、ニックリッシュにおいては、一方において、人間が個體性と肢體性とにおいて存在し、その肢體性を介して社會の全體性を自らのうちに内在せしめて存在するのであり、他方において、こうした諸諸の人間をその構成員とする社會が、その全體性において、構成員に超越的にして同時に内在的な存在をなすのである。

さて、第四にとりあげられるべき問題は、ニックリッシュのいわゆる「人格」に關するものである。ニックリッシュによれば、人間はその良心において、自分が一つのそれ自身完結せる全體——個人格——(ein in sich abgeschlossenes Ganze——Einzelpersönlichkeit——)であり、同時に、一つのより大きい全體——人類——(ein größeres Ganze——Menschheit——)の一肢體であると意識している。すなわち、人間は、一つのより大きい全體の本質(Wesen)を彼の人格(Persönlichkeit)のうちに表現しているのである。⁽⁸⁾

この場合、人格は、單に一つの全體としての個體性において理解せられるのではなくて、個體性と同時に、肢體性をふくむものとして、肢體性を介して社會の全體性をそれに内在せしめるものとして、解せられねばならない。すな

わち、ニククリッシュによれば、個個人は、それが個體性と肢體性との二重性格において存在することにより、具體的な人格をもちうるのである。⁽⁹⁾ こうした問題はまた、第一命題と關連する。そして、第一命題における「人類」ないし「人間であること」は、第二命題における人間において、個體性と肢體性との二重性格を實現する。換言すれば、第一命題の「人間であること」の意味における人類は、第二命題においては、人格を意味することとなるわけである。⁽¹⁰⁾

さて、以上、人間の存在性格に關する問題の考察から、ニククリッシュの意味する共同體の第一の特質が理解せられねばならない。すでに考察したごとく、人間が個體性と肢體性との二重性格において存在することは、こうした二重性格的存在としての人人をその構成員とする社會が、その全體性において、構成員の個體性に超越的にして、同時に、構成員の肢體性を介して構成員に內在的な存在をなすことをも意味する。すなわち、そうした社會は、その全體性において、構成員に超越的にして同時に內在的な存在をなす。ニククリッシュは、こうした社會を、「社會的有機體」(sozialer Organismus)⁽¹¹⁾ ないし共同體となづけるのである。そしてまた、人間が社會的存在であることの意味は、人間が二重性格的存在であること、ないし共同體的存在であることと解せられているのである。かくて、共同體は、これをその存在性格に關して特質づけるならば、つぎのようになる。すなわち、共同體は、これをその構成員についていえば、二重性格的存在としての人間をその構成員とする社會であり、また、これを社會そのものについていえば、社會がその全體性において、構成員に超越的にして、同時に內在的な存在をなす、というのがそれである。しかも、そのみではない。共同體は個人の存在をこえた持續的存在をなすのである。これが共同體の第一の特質である。

ところで、人間の存在性格に關する意識の問題が、なお考察せられねばならない。ニククリッシュによれば、精神

は自發的に自らを意識している。そして、良心は、「精神が自發的に自らを意識していること」(das „Selbstständig sich seiner selbst bewußt sein“ des Geistes)である。それゆえ、良心は精神の働き、ないし精神の働きの状態を意味する。しかも、「自發的に」は、經驗を通すことによつて間接的ではない意味において「直接的に」であり、また、「經驗とは獨立に」ないし「先驗的に」であるがゆえに、直接的意識ないし先驗的意識 (Vordewußsein) である。さらにまた、良心は、精神が「自らを」意識していることでもある。つまり、良心は、直接的自己意識 (unmittelbares Selbstbewußtsein) ないし先驗的自己意識である。さて、良心を上述の第一命題および第二命題との関連においてみよう。良心は、これを第一命題についてみるならば、人間が精神的存在であることに關する直接的自己意識である。けだし、人間は精神であるからである。ところで、精神的存在としての人間は、第二命題においては、二重性格的存在としての人間となる。それゆえ、良心を第二命題についてみるならば、それは、人間が二重性格的存在であることに關する直接的自己意識⁽¹²⁾となる。

さて、人間存在の第二の問題は、人間の存在性格に關する意識ないし良心にもとづく、人間の行動の性格に關する。ニックリッシュは、こうした問題を、二重性格的存在としての人人の間にみられる行動の方向の問題としてのべている。けだし、二重性格的存在としての人間は、社會的存在であるからである。彼によれば、人間がその良心において、自分が二重性格的存在であることを意識していることによつて、そうした人人の間に一體化 (Einung) と肢體化 (Gliederung) との二つの方向が可能となる。それゆえ、そうした行動の方向への傾向は、すでに良心のうちに興えられているのである。しかし、同時にそれはまた、諸諸の經驗を通してはじめて、より明瞭かつ強力となるのである。

さて、共同體は、一體化と肢體化によつて形成せられる。そして、これら二つの方向は密接不可分の關連にある。すなわち、一體化は、人間がより大きい全體の肢體であることなしには考ええられず、また肢體化は、より大きい全體なしには不可能である、というのがこれである。⁽¹³⁾

さて、一體化と肢體化との二つの行動方向ないし行動性格に關するニックリッシュの見解から、彼においては、これら二つの方向への契機が、個體性と同時的な肢體性のうちにみいだされているものと解せられる。けだし、より大きい全體の「一肢體」は、肢體化の方向において發現する肢體性を、また社會としての「より大きい全體」は、一體化の方向において發現する全體性を表現するものであり、しかも、こうした肢體性と全體性とは、相互前提的關連をもつものにほかならないからである。かくて、一體化と肢體化とはともに、個體性と同時的な肢體性を契機として生起する社會形成の二つの方向、ないし社會内における人人の行動の二つの方向として、前者は個體から全體への方向を、後者は全體から個體への方向を意味するものとして解せられることとなるのである。

ところで、人間存在に關する第二の問題から、共同體の第二の特質が把握せられる。すなわち、人人の間の一體化・肢體化的行動によつて形成せられる社會、ないし、その構成員の間に一體化・肢體化の二つの行動方向ないし行動性格を可能ならしめる社會が、共同體にほかならない、ということこれである。

以上、われわれは、人間存在の問題に關して二つの問題を考察するとともに、こうした考察のうちに、共同體一般に關するニックリッシュの見解を明らかにした。ところでこの場合、共同體に關するこれら二つの特質は、いずれも、人間の直接的自己意識である良心に由來するものであることが注意せられねばならない。

さて、ニックリッシュは、經營について共同體をどのように理解しているであろうか。彼は、共同體一般に關してのべた特質をもつ社會が、經營においてもみいだされるところとして、こうした社會を、經營とその構成員との關係のうちに理解せんとする。ニックリッシュによれば、經營とその構成員との間には、二つの種類の關係がある。その一は間接的關係 (mittelbare Beziehung) とよばれる。そして、それは、肢體職分の體系としての經營組織⁽¹⁾において、構成員が經營と間接的に結合することのうちにみられる關係である。これに對して、他は直接的關係 (unmittelbare Beziehung) と稱せられるものであり、構成員が間接的關係とは一應無關係に、經營と直接的に結合することによつて成立する關係である。まず、間接的關係から考察することとする。さて、經營の全體職分 (Gesamtaufgabe) は、經營を構成する個個人に對して割當てられることを必要とする。そして、それは、個個人が自分に割當てられた職分を達成することによつて、實現せられるのである。ところで、こうした全體職分の實現は、個個の給付が持續的に結合せられ、調整せられることによつて、はじめて可能となる。そして、そのためには、諸種の機關 (Organe) を必要とする。その一は、あらゆる個別的給付のうちに統一性が持續的に保證せられるように配慮する首腦部 (Hauptstelle) であり、最上位の機關である。その二は、こうした首腦部のもとにおいて、給付の統一性について配慮し、また給付相互間の調和に關して配慮し、さらに給付が完成せられねばならない時點に關して配慮する、諸諸の肢體的地位 (Gliederstellen) である。そして、その三は、個個の作業を遂行する最終の肢體的地位である。さて、間接的關係は、經營の全體職分を肢體的地位の遂行すべき個別職分 (Einzelaufgaben) に分割するとともに、肢體的地位がこうした個別職分を實現し、これによつて、全體職分が達成せられるようにすることと關連する。そして、全體職分の個別職分への分割は、

上述の三つの段階を通して成立するわけである。すなわち、全體職分は諸諸の部門に肢體化せられ、さらにそれぞれの部門の職分が肢體化せられて、ついには最終の肢體的地位の職分にまで到達するのである。こうした職分の肢體化においては、下位の肢體的地位が上位の肢體的地位に依存し、上位の肢體的地位は下位の肢體的地位に對して、より上位の肢體的地位への媒介をなす。そして、このような媒介の連續のうちに、肢體的地位が相互に依存する關係の全體がみいだされるのである。このような肢體的地位の依存關係の全體は、これをつぎのように表現することもできる。すなわち、まず最終の肢體的地位が經營の廣い下部構造を形成し、つぎにこれらを統轄し統制する諸諸の肢體的地位が、經營の全體職分によつて必要とせられる數と秩序とにおいて順次上方にならび、このようにしてその頂點にいたり、そこに首腦部がみいだされる、というのがそれである。ところで、經營とその構成員との間接的關係は、まさにこうした肢體的地位が、その相互依存關係の全體に對してもつ關係として理解せられるのである。しかも、分業が高度化することによつて、肢體的地位の依存關係がその範圍を擴大するときは、とくに最終の肢體的地位にある構成員は、全體と直接的につながる地位としての首腦部にある構成員から遠くへだたることとなる。それゆえ、彼等にとつては、こうした依存關係の全體についての表象をもつこと、またこのような全體と結合しているという感情、すなわち共屬感(Gefühl der Zusammengehörigkeit)をもつことは困難となる。ところで、肢體的地位の依存關係の範圍の擴大はまた、最終の肢體的地位の形成する經營の下部構造の擴大をも意味する。そして、それによつて、最終の肢體的地位にある構成員は、全作業過程の一小部分のみを擔當しなければならぬのであるが、こうした個個的部分的な作業は、それらの長い連鎖として理解せられる全體のなかにおいてのみはじめて意味をもつものであり、しかも、

こうした長い連鎖のなかにあつてなおかつその最後までを見透し、全體をみとどけて、自分の作業がこうした全體のなかでもつ意味を十分に認識するということは、ますます困難の度を加えるわけである。以上これを要するに、分業の高度化とともに、肢體的地位の依存關係の全體は漸次その範圍を擴大することとなり、したがつて、それら肢體的地位にある構成員、ことに最終の肢體的地位にある構成員の經營に對する間接的關係もまた、漸次延長せられることとなる。そこで構成員、ことに最終の肢體的地位にある構成員が、經營という全體についての表象をもち、あるいは經營に對して共屬感をもつということは、ますます困難となるわけだといわねばならない。⁽¹⁶⁾

さて、ニックリッシュによれば、經營とその構成員との關係の第二のものは、直接的關係と稱せられるものであつた。そして、こうした關係は、構成員が間接的關係とは無關係に、經營と直接的に結合することのうちにみいだされるものであつた。それゆえ、それは第一の關係とは全くその性質をことにするものである。こうした關係によつて、構成員は、全體についての表象と、全體と結合しているという共屬感とを、容易にかつ效果的に保持することとなる。そして、こうした關係は、分業の高度化に即應して、ますますその育成強化が實現せられねばならない。ところで、いかにして、こうした關係が育成強化せられるべきであるかは、きわめて困難な問題をなすのである。だが、經營協議會(Betriebsrat)は、こうした關係の育成に對して、必要な制度であると解せられる。のみならず、共同體意思の形成は、この種の制度との關連なしには考ええられないのである。さらに、福利施設、ならびに、肢體職分の體系としての經營組織、肢體的地位の職能、肢體的地位相互間の關係等を熟知せしめるために行われる講演等に關する諸施策もまた、直接的關係を育成強化するためのものと解せられねばならない。⁽¹⁶⁾

以上において、われわれは、經營とその構成員との關係としての、間接的關係と直接的關係とのそれぞれについて、その内容を明らかにした。そして、ニックリッシュは、第一の關係が肢體化によつて、また、第二の關係が一體化によつて形成せられること、あるいは、前者のうちに肢體化的行動の方向が、後者のうちに一體化的行動の方向が存在するものと解する。さらにまた、こうした二つの行動方向を、間接的な形成方向 (mittelbare Gestaltungsrichtung) および直接的な形成方向 (unmittelbare Gestaltungsrichtung) ともよんでいる。つまり、彼は經營における共同體を、それが上述の二つの關係を包含するものと解しているわけである。それゆえ、このことは、二つの關係をその内容とするものとしての經營とその構成員との關係のうちに、二重性格的存在としての經營構成員がみいだされることを意味するものである、ということが注意せられねばならない。⁽¹⁷⁾

さて、われわれはさきに、經營における共同體が、經營の目的と關連するものであることをのべた。共同體を経營目的との關連においてみるならば、經營全體の目的と構成員個體の目的とは一致する。ただし、經營社會における構成員の個體性と肢體性とは同時的であり、經營社會はその全體性において、その構成員に超越的であると同時に内在的であるからである。この場合、こうした目的の一致は、そこからの強制によるものではなくて、經營全體の目的を、構成員が自ら指定したものとして、内面的に承認するものであることが注意せられねばならない。そして、こうした目的の一致のうちに、共同體の第三の特質がみられることとなるのである。すなわち、共同體は、たんに構成員各自の目的を達成するための手段的存在としての社會ではなくて、社會全體の目的と構成員個體の目的との一致において理解せられる、自己目的的存在としての社會を意味するわけである。⁽¹⁸⁾

- 註(1) H. Nicklisch : Organisation, S. 14, 62~63, 65.
—————: Grundfragen, S. 58~59.
- (2) H. Nicklisch : Organisation, S. 17.
- (3) H. Nicklisch : Organisation, S. 17, 21~22, 66~68.
—————: Grundfragen, S. 49.
- (4) H. Nicklisch : Organisation, S. 17.
- (5) 「個體性」のかわりに「全體性」(Ganzheit) という言葉も使われている。しかし、ここにいる「全體性」は「一のより大きな全體」の意味における「全體性」ではない。前者の「全體性」は後者の「全體性」から區別せられねばならない。それゆゑ、前者は「個體性」という表現を用ひてやらねばならぬ適切なものである。(H. Nicklisch : Organisation, S. 67, 78.)°
- (6) リンネルマンの「肢體」(Glied) のかわりに「部分」(Teil) という言葉を用ひてやる。(H. Nicklisch : Organisation, S. 67.)°
- (7) H. Nicklisch : Organisation, S. 49, 67.
- (8) H. Nicklisch : Grundfragen, S. 49.
- (9) H. Nicklisch : Organisation, S. 21.
- (10) H. Nicklisch : Organisation, S. 66.
- (11) H. Nicklisch : Organisation, S. 45, 57, 75, 83, 96.
- (12) H. Nicklisch : Organisation, S. 6, 17~19, 67.
- (13) H. Nicklisch : Organisation, S. 35~37, 78, 81~82, 93.

- : Grundfragen, S. 49, 60~61.
- (14) 漢利重隆 經營管理總論 (新訂版) 千倉書房 昭和三十一年 二八〇 三八四頁
- (15) H. Nicklisch: Organisation, S. 81~82.
 —————: Grundfragen, S. 14, 46~48, 51~52.
- (16) H. Nicklisch: Organisation, S. 81~82, 92.
 —————: Grundfragen, S. 48, 51~52.
- (17) H. Nicklisch: Organisation, S. 81~82.
 —————: Grundfragen, S. 49, 61.
- (18) H. Nicklisch: Organisation, S. 67~68.
 —————: Grundfragen, S. 50~51, 59~60.

三 經營における分業と共同體

ニックリッシュにおいては、分業の問題は、彼のいわゆる間接的關係のうちにみられる經營勞働、すなわち管理勞働と作業とを包含する經營勞働と關連するのであるが、とくに製造過程について論じられている。そして、そこでは、機械その他の物質と人間との關係が問題とせられている。ところで、こうした關係の考察は、物質一般に關する彼の見解を理解することによつて、容易ならしめられると考えられる。それゆえ、第一に物質一般に關する問題を取りあげ、ついで分業に關する彼の所説を考察し、最後に、共同體と分業との關係の考察にすすむこととしよう。

さて、ニックリッシュは、物質の世界を因果關係において把握している。彼によれば、諸物は種種の形態をもつて存在するのであるが、それらの形態は物質の本質をしめすものではない。物質の本質は力 (Macht) である。物質はこうした力を通してその形態をもつわけである。ところで、こうした事態は、二つの點から説明せられねばならない。その一は、物質を空間的な關連においてみる場合である。こうした觀點にたつ場合、物質は廣がりをもつということが出来る。ところで、物質の世界は、諸部分ないし諸肢體からなる全體をなす。こうした全體と部分ないし肢體との關係は、物質の存在形態である諸物についてもいわれうる。そして、物質の世界を諸部分からなる全體たらしめ、また、こうした世界において全體と部分とを結びつけ、あるいは部分相互を結びつけて全體を可能ならしめ、これによつて、物質の存在形態としての諸物の存在を可能ならしめるものは、引力 (Anziehungskraft) である。さて、第二に、物質を時間的な關連においてみる場合、それは持續において存在する。物質のそれぞれの部分はそれぞれの時點において全體と結合せしめられ、あるいは、それぞれの部分は他の諸部分と結合して全體を生じ、これによつて、諸物はその形態を變化せしめられる。それゆえ、物質の時間的な關連は、その空間的な關連をそれに内在せしめるものであるということが出来る。換言すれば、物質はその持續のうちに、廣がりを内在せしめて存在するわけである。ところで、諸物のこうした形態變化にもかかわらず、物質世界全體としては、消滅もなければ生起もない。物質世界全體は、個個の諸物の形態變化をそのうちに包含しながら存續するわけである。以上が、物質が持續において存續することの意味である。そして、個個の諸物の形態變化を可能ならしめ、しかも、物質世界全體の存續を可能ならしめるものは、存在力 (Seinskraft) として解せられる。さらにまた、存在力が、諸物に關して全體と部分とを結びつけ、

これによつて形態變化を生ぜしめる場合、ここでは、物質のそれぞれの部分は他の部分と一緒になつて全體を明らかにすると同時に、このことを通して部分そのものも明らかにせられ、また、全體は部分を部分として明らかにすると同時に、このことを通して、全體そのものも明らかにせられる。それゆえ、二重性格的存在としての人間の行動の方向を、こうした事態に翻譯する場合、存在力は一體化的・肢體化的力 (*einende und gliedernde Kraft*) としても解せられる。これを要するに、物質は、そのなかで作用する力を通してのみ、存在しうることとなる。こうした意味において、物質は力であるということができるのである。そして、こうした力は、その作用のうちに、すなわち、諸物の形態變化のうちに、具體的にみいだされるわけである。⁽¹⁾

さて、ニックリツシュは、こうした存在力としての力が、諸物の形態變化を可能ならしめるものとし、これを原因 (*Ursache*) として理解する。そして、こうした形態變化に關して、因果關係を説明する。彼によれば、諸物の形態變化は、時間的經過においておこなわれる。そして、その場合、諸物は根據 (*Grund*) と結果 (*Wirkung*) において理解せられる。諸物が結合してある形態の物質を生ずる場合、それら諸物は根據部分とよばれ、全體としての根據を構成する。それら諸物の結合によつて生じたある形態の物質は、結果として解せられる。ところで、根據は、結果の擔手 (*Träger der Wirkung*) と結果の擔い手の環境 (*Umgebung*) との二つの部分ないし肢體に分たれる。それゆえ、根據部分としての諸物は、これら兩者のうちのいずれかに屬するわけである。すなわち、結果の擔い手は一つのものである場合と、諸物をその部分とする場合とがあり、結果の擔い手の環境についても同様の場合がある。原因としての力は時間的經過において、諸物を結合せしめて全體としての根據を形成せしめ、それによつて、新たな形態

をもつ結果を生ぜしめるわけである。換言すれば、力は根據を通して結果を生ずるわけである。この場合、根據部分および根據に關しても、結果に關しても、それは種種であるが、原因はつねに同一である。すなわち、力なのである。そして、力はその作用を通して、ないしは諸物の形態變化のうちに、具體的にみいだされるのである。例えば、植物の發芽の場合、種子は結果である芽に對して結果の擔い手であり、發芽に必要な種子以外の諸物は、結果の擔い手の環境である。そして、原因である力は、種子から芽への形態變化のうちにみいだされるわけである。

さて、ニククリッシュによれば、根據には自然的根據(Natürgrund)、人工的根據(Kunstgrund)、目的根據(Zweckgrund)の三つの種類がある。第一の根據は人間勞働がそれに加わつていない根據であり、第二の根據は人間勞働が加えられた根據である。そして、第三の根據は第一、第二の根據のいずれにも關連をもつ。第三の根據についてのべよう。さて、人間はその肉體を通して物質世界とつながりをもつ。ところで、物質の世界は因果關係のうちに存続する。これに對して、人間の活動は、こうした因果關係とは逆である。すなわち、つぎの出來事が前の出來事を規定する。人間と物質との關係においては、物質に關してあらかじめ結果が表象せられ、目的が指定せられる。そして、これにもとづいて、人間は物質に働きかける。すなわち、勞働する。ここでは、人間は、自然的根據あるいは人工的根據を、物質の因果關係の領域において、その目的にしたがつた根據たらしめる。これが目的根據である。こうした目的根據を通して、結果が生産せられる。すなわち、人間の目的にしたがつた一定の方向において、物質の形態變化がおこなわれる。換言すれば、人間は物質の因果關係の領域において、その目的にしたがつて、物質の形態變化に方向を興えるわけである。そして、目的結果は目的表象に對應するのである。それゆえ、根據は結果にも依存すること

となり、物質の世界におけるように、結果が全く根據に依存するのみではないことが注意せられねばならない。ところで、こうした事情と關連して、なお、根據と結果との關係がのべられなければならない。物質世界の因果關係においては、結果に對して根據は過不足ないはずである。これに對して、目的結果に對しては、必ずしも根據が過不足なく形成せられるわけではない。根據に過不足がある場合には、十分な目的結果はえられない。根據が過不足なく形成せられた場合にも、同一の目的結果を持續的に獲得せんとする場合には、同一の目的根據が持續的に維持せられねばならないこととなる。⁽³⁾

さて、第二の問題は分業、ことに製造過程における分業に關するものである。ニククリッシュによれば、經營における目的結果ないし商品の生産は、自然的根據あるいは人工的根據を、目的根據に轉換することによつておこなわれる。經營においては諸諸の道具、諸諸の機械、諸諸の建物等の設備、諸補助材料、諸原料等が根據部分として諸根據を形成する。そして、諸原料は結果の擔い手となり、その他の諸物は結果の擔い手の環境に屬する。ところで、諸根據の排列の仕方には二つがある。一は繼起的 (nacheinander) な排列の仕方であり、他は並立的 (nebeneinander) な排列の仕方である。前者の場合には、結果の擔い手は、まず第一の根據に屬し、ついで第二の根據に屬し、順次につぎの根據に屬する。すなわち、結果の擔い手はその環境と結合して、第一の根據からの結果としての形態において第二の根據のなかに現われ、ついで、第二の根據からの結果としての形態において第三の根據のなかに現われ、最終の結果としての商品が生産せられるまで、順次につぎの根據のなかに現われる。例えば、鑛石から銑鐵の状態、銑鐵から半製品の狀態、半製品から壓延鐵線の状態 (Draftstufen) 、壓延鐵線から無頭釘 (Walzdraht) がこれである。

この場合、鑛石は結果の擔い手であり、それは第一の根據における結果の擔い手の環境と結合して、第一の根據から結果としての銑鐵の形態において第二の根據のなかに現われ、ついで、第二の根據からの結果としての半製品の形態において第三の根據のなかに現われ、さらに、第三の根據からの結果としての壓延鐵線の形態において第四の根據のなかに現われ、最後に無頭釘という形態をとるわけである。そして、諸設備はこれらの結果の諸諸の段階に應じて、結果の擔い手の環境を形成する。このようにして繼起的に排列せられた諸根據は、根據序列(Grundfolge)としてしめされる。つぎに、諸根據の並立的排列の場合には、結果の擔い手は多數の部分に分たれている。これら諸部分のそれぞれのもは、繼起的排列の場合におけると同等の方法で、順次につぎの根據のなかに現われる。そして、それぞれの最終結果が生じ、それら最終結果が組立てられて、全體結果としての商品を形成する。この場合、純粹な並立は存在しえないことが注意せられねばならない。すなわち、それぞれの最終結果が、諸部分として全體結果を形成する場合、そこにはなお、諸部分としての諸諸の最終結果は、それらの環境としての根據を通して繼的に結合し、全體結果ないし商品を形成するからである。ところで、並立的に排列せられた諸根據は根據並列(Grundreihe)としてしめされる。例えば、機械の製造がこれである。そこでは、並立的に排列せられた諸根據からそれぞれの最終結果が生じ、それらの最終結果は諸部分として、組立作業を通して全體結果を構成することとなるわけである。さて、諸根據に關する以上二つの排列は、物質における力ないし原因が、諸根據を通して、商品としての結果を生ぜしめる過程をしめす。すなわち、物質の形態變化の過程をしめす。そして、諸根據は、そのいずれの排列においても、全體としての根據域(Grundfeld)を構成する。ところで、根據域は、商品としての結果に對してなお十分ではない。それが十

分たりうるためには、第一にそこに人間の肉體的勞働 (körperliche Arbeit) を、また第二に、こうした作業する人をも包含する根據域の計畫的な管理を擔當する精神的勞働 (geistige Arbeit) を必要とする。前者は、根據域での生産ないし物質の形態變化における力の發現をしめし、根據域にある人人が、自分の擔當する作業の結果に對して根據を配慮することをしめす。後者は、作業する人人をもふくむ根據域に關する計畫を通じて、根據域の形成を指導し、根據域の形成が計畫通りにおこなわれているかどうか、根據域が結果としての商品の生産、ないしこうした結果への形態變化に對する最も合目的な道をしめすものであるかどうか、また、根據域がいかに改善せられねばならないかを看取・配慮し、これによつて新しい計畫をたてる勞働を意味する。經營勞働 (Betriebsarbeit) は、これらいずれの勞働をも包含する。そして、この場合、いずれの勞働に關しても、純粹な肉體勞働、純粹な精神勞働は考えられないのである。⁽⁴⁾

さて、ニックリツシュによれば、經營勞働は物質の形態變化を方向づけるのであるが、それは、分業・協業という形式にしたがつておこなわれる。こうした形式に對して、人間行動の方向である一體化・肢體化を翻譯するならば、分業は肢體化によつて、また協業は一體化によつてしめされうる。そして、根據域における勞働、ないし最終の肢體的地位にある人人の勞働も、こうした形式にもとづいておこなわれるのであり、そこに、物質のなかで働く力の一體化・肢體化と、人間勞働の一體化・肢體化とが合一するわけである。ここに、目的結果としての商品生産が展開せられ、こうした生産活動のうちに、目的結果へ方向づけられた一體化的・肢體化的力の發現がみられるわけである。ところで、こうした生産活動においては、人人の肉體的勞働の機械への移轉が、ますます増大する傾向にある。そして、

こうした傾向は、最終の肢體的地位にある人人をして、技術的裝置 (technischer Apparat) の單なる一部分たらしめる傾向を意味するものであることが注意せられねばならない⁽⁵⁾。

さて、最後に、共同體と分業との關係がのべられなければならない。ニククリッシュによれば、共同體と分業とは、同等な時點において生じなければならない。もし、共同體が發展せしめられないで、分業のみが發展ないし高度化せしめられる場合、根據域においていとなまれる作業においては、人人は根據域、ことに技術的裝置の一部分にすぎなくなるのであり、物質の因果關係の作用の鎖につながれることとなる。これに對して、分業の高度化に即應して共同體が發展せしめられる場合、人人は生産的氣分 (produktive Stimmung) にみちた作業をいとなむことができる。ただし、人人は共同體の存在によつて眞に人間として存在することができ、經營の目的を内面的に承認することができからである。ところで、分業が存在しない場合、共同體も存在しない。けだし、商品としての目的結果は生産せられえず、したがつて、經營の目的は達成せられえないからである。それゆえ、共同體と分業とは、均衡的に發展せしめられねばならない。こうした發展がなされない場合には、持續的には經營は存続しえないこととなる。兩者の均衡的發展のうちにのみ、經營の生活力 (Lebenskraft) なし生活能力 (Lebensfähigkeit) は、ますます増大せられるのである⁽⁶⁾。

註(1) H. Nicklisch: Organisation, S. 2~4, 9 16, 85.

(2) H. Nicklisch: Organisation, S. 4~16.

(3) H. Nicklisch: Organisation, S. 9~14, 41~42, 48, 87.

- (4) H. Nickisch: Organisation, S. 14, 51~55, 58~59, 65.
 —: Grundfragen, S. 16.
- (5) H. Nickisch: Organisation, S. 77~78, 84~94.
- (6) H. Nickisch: Organisation, S. 58, 73, 80, 82.
 —: Grundfragen, S. 6, 51~52.

四 目的指定の法則と一體化・肢體化の法則

ニックリッシュは、共同體および分業に關する以上の論述を、「法則」(Gesetz)のかたちにおいて體系的に展開せんとする。彼によれば、「法則」は、經營がこれにしたがつて生活すべき合則性(Zweckmäßigkeit)であるが、同時にそれは、それが現實の經營において完全に實現せられたものとして認められるといふことは、差當り無關係なのである。こうした意味における「法則」として、彼は「目的指定の法則」(das Gesetz der Zwecksetzung)、「形成の法則」(das Gesetz der Gestaltung)、「維持の法則」(das Gesetz der Erhaltung)の三つをあげた^(一)。そして、これらの法則が實現せられたものとしての經營の像を描かんとするのである。

さて、本稿の問題にとつて重要なのは、これら三法則のうち、「目的指定の法則」および「形成の法則」である。そこで、われわれはつぎに、これら二法則に關して、ニックリッシュの見解を明らかにすることとしよう。

ニックリッシュによれば、經營生活は、經營の目的を通して方向づけられる。こうした意味において、經營の存在

を特質づける第一のものは、經營目的ないしそうした目的の指定に關するものであると解せられる。ところで、經營の目的は、商品生産を通して貨幣を獲得し、これによつて、構成員の消費欲求からの派生的欲求を充足することにとめられた。經營における共同體は、こうした目的が、構成員によつて、構成員自らがこれを指定したものととして、内面的に承認せられることを可能ならしめる。さて、「目的指定の法則」は、經營目的のこうした内面的承認と關連する。それゆえ、それはまた、經營における共同體の特質と關連するものであると解せられるのである。だがそれのみではない。同時にまた、それは、現實の經營がこれにしたがわねばならない合則性として、現實の經營に對して、構成員が經營全體の目的を内面的に承認するよう目的の指定をなすべきこと、また、構成員に對して、二重性格的存在として目的を指定すべきことを要請するものであることが注意せられねばならない。さて、經營全體の目的と、構成員個體の目的とが一致する場合、構成員は自由を感じる。それゆえ、こうした法則は、「自由の法則」(das Gesetz der Freiheit)ともよばれる。ところでまた、こうした目的の一致は、構成員が二重性格的存在であることにもとづくのであるが、しかも、そうした存在は、良心に由來する。かくて、目的指定の法則は、「良心の法則」(das Gesetz des Gewissens)としても解せられる。さらにまた、良心は、「精神が自らを意識していること」であり、人間の本質が精神であることによつてのみ、可能なわけである。それゆえ、「目的指定の法則」は、「精神の法則」(das Gesetz des Geistes)としても解せられうる。ところでこの場合、目的指定の法則、自由の法則、良心の法則、精神の法則は、人間の意識に關するものであることが注意せられねばならない。かくて、第一の法則は、經營における共同體の特質であり、現實の經營に對する要請としてのいわゆる合則性であり、人間の意識に關するものであると解せられるわけ

である。⁽²⁾

さて、第二の法則である一體化・肢體化の法則は、二重性格的存在としての經營構成員の行動と關連する。ところで、一體化・肢體化は、二重性格的存在としての構成員の直接的自己意識ないし良心によつて可能となる。そして、それは共同體としての經營形成の二つの方向、あるいは經營社會における構成員の行動の方向として、二重性格的存在としての構成員の行動方向を特質づける。同時にまた、共同體としての經營は、こうした二つの方向をもつ行動によつて形成せられる社會として、あるいは、構成員に二つの行動方向を可能ならしめる社會として、特質づけられるのである。かくて、一體化・肢體化の法則は、共同體としての經營の、またそうした社會における構成員の存在の第二の特質として解せられる。しかも、それが現實の經營に對して、構成員の一體化・肢體化を可能ならしめるべきことを要請するものであることは、いうまでもない。なお、こうした一體化・肢體化と關連して、これが翻譯せられたものとして、分業・協業が理解せられる。分業・協業は、經營勞働がこれにしたがつて展開せられるべき形式である。しかも、とくに製造過程における勞働は、こうした形式によつて遂行せられることによつて、物質において働く一體化的・肢體化的力と合一することとなる。⁽³⁾

さて、ニクリツシュによれば、「目的措定の法則」と「形成の法則」とがこのように特質づけられることによつて、これら二法則の關係もまた、おのずから明らかとなる。すなわち、「形成の法則」は「目的措定の法則」に由來するものである。それゆえ、「目的措定の法則」こそが、本源的法則 (ursprüngliches Gesetz) であるものと解せられるのである。⁽⁴⁾

- 註(1) H. Nickisch : Organisation, S. 66.
 _____: Grundfragen, S. 55, 60.
 (2) H. Nickisch: Organisation, S. 66~77.
 _____: Grundfragen, S. 55~60.
 (3) H. Nickisch: Organisation, S. 77~94.
 _____: Grundfragen, S. 60~61.
 (4) H. Nickisch: Organisation, S. 77.
 _____: Grundfragen, S. 62.

五 共同體化と分業的生産の高度化

以上、われわれは、經營における共同體と分業とに關するニックリッシュの見解を明らかにすることに努力した。ところで、こうした彼の見解には、なお、われわれの検討を要する問題がのこされている。その第一は、共同體、分業、および物質において作用する力のいずれにも關連する、一體化・肢體化の問題である。第二は、共同體に關する問題である。そして、これには二つがある。その一は、ニックリッシュのいわゆる共同體を、經營とその構成員との關係のどこにみいだすかの問題である。他は、共同體と共同體化との關連の問題である。第三の問題は、彼のいわゆる分業・協業に關する。そしてこれは、いわゆる分業・協業の検討と、機械を手段とする分業的生産の高度化とに關

するものである。そして、これら三つの問題の批判的検討にもとづいてとりあげられるのが、共同體化と分業的生産の高度化との關連である。これが第四の問題である。まず、第一の問題からとりあげることとしよう。

さて、ニックリツシュにおいては、一體化・肢體化は、本來的には、人間存在の二重性格にもとづく人間の行動性格を意味するものと解せられた。すなわち、それは個體性と同時的な肢體性を契機として生起する人間行動の二つの方向を意味した。ところで、「一體化・肢體化」という言葉そのものは、はたして、こうした人間行動の方向ないし性格を、正當に表現するであろうか。一體化という言葉そのものは統一體 (Einheit) 化ないし全體化を意味するはずである。それゆえ、一體化と肢體化とは、全體性と肢體性との關連と同一の關連をもつものと解せられねばならない。つまり、「一體化・肢體化」という言葉は、人間存在の個體性を排除し、肢體性のみ表現するにすぎないのであり、したがつて、個體性と同時的な肢體性を契機として生起する人間行動を表現するものとしては妥當ではない。さて、人間行動は、目的と關連するところにその特質をもつ。それゆえ、それは、經營目的およびこれと關連する諸諸の個別的目的に關して、理解せられねばならない。ところで、個體性と同時的な肢體性を契機として生起する人間行動は、それが個體性と肢體性とを同時的な契機とするものであると解せられることによつて、もつとも明確に理解せられうるであらう。すなわち、二重性格的存在としての人間行動ないしその性格は、個體性と肢體性とを同時的な契機とするものであると解せられるべきである。そして、個體性と關連して一體化を、肢體性に關連して肢體化を理解するならば、一體化は個別化として、肢體化は全體化として解せられねばならない。つまり、二重性格的存在としての經營構成員の行動は、個別化と全體化とへの方向を、同時にそれに内在せしめるものと解せられる。そしてまた、個別化

と關連して分裂への方向を、全體化と關連して統一への方向を理解するならば、二重性格的存在としての經營構成員の行動は、そのうちに分裂と統一とへの方向を同時に内在せしめるものとしても解せられることとなるであらう。かくて、經營における共同體は、個別化と全體化とを同時に持つ構成員の行動、あるいは、分裂と統一とへの方向を同時に持つ人間行動によつて、形成せられるものとして解せられることとなる。さて、經營における共同體を形成する人間行動の性格、あるいはそうした共同體における人間の行動性格を、このように特質づける場合、物質において作用する一體化的・肢體化的力、分業・協業について理解せられる肢體化・一體化は、どのように解せられうるであらうか。ニククリッシュは、人間存在について、それが一つの全體であると同時により大きい全體の肢體であるとのべ、また、物質についても、その形態をもつそれぞれの物が、一つの全體であると同時に肢體である、としている場合もある。しかし、こうした場合は、きわめてすくない。ところで、彼によれば、人間は精神であることによつて、他の諸物から區別せられる。そして、人間は、その精神の働かないし働きの状態としての良心において、自分が二重性格的存在であることを自覺している。この場合、自覺ないし自己意識と、その内容である二重性格とは、分離せられないことが注意せられねばならない。とすれば、諸物は、それらが人間存在と同等な意味において、それぞれ一つの全體であると同時に肢體ないし部分 (Teil) である、とは解せられない。けだし、ニククリッシュもまた、諸物については、自覺を考えないからである。ところで、彼は、物質に關する論述のほとんど全體にわたつて、物質を全體と部分ないし肢體との關係において理解する。しかし、それは、より大きい全體において、全體であると同時に部分であることを意味するものではない。つまり、全體であるか、部分であるかにすぎないのである。ニククリッ

シユにおいては、一方において、人間と物質とのこうした區別がみられるにもかかわらず、他方において、すでにのべたごとく、両者が混同せられている場合もあるのである。さて、人間の存在性格と物質のそれとをこのように區別する場合、物質のなかで作用する力は、まさに、一體化的・肢體化的力として、特質づけられねばならない。そして、分業・協業を、經營勞働がそれにしたがつて遂行せられる形式とし、こうした形式にしたがつて展開せられる經營勞働、ことに最終の肢體的地位にある製造過程の人人の勞働が、物質の一體化的・肢體化的力と合一すると解する彼の見解からすれば、分業・協業は、肢體化・一體化によつて表現せられうるであらう。ところでなお、人間行動と物質的力の作用とのこうした區別は、人間行動が、目的の指定ないし目的に關して問題となるのに對して、物質的力の作用が、因果關係のなかでみられるものであることも關連すると考えられる。前者においては目的の選擇が問題となるのであり、こうした目的の選擇と關連して、二重性格の人間存在、あるいは、二重性格を契機として生起する、分裂への方向と統一への方向とを同時的にもつ人間行動が、理解せられねばならないのである。そして、そこにこそ、人間存在、あるいは人間行動の特質があるものと解せられる。これに對して、後者においては、因果論的必然性が問題となるのであり、ここでは、目的の選擇の餘地はないわけである。人間存在について二重性格を理解し、しかも、とくに個體性を理解するのに對して、物質をたんに全體と部分との關連において把握する意味も、こうしたことと關連するものであるといえらるであらう。

さて、第二の問題は、共同體に關する。そして、その一は、共同體を、いわゆる經營とその構成員との關係のどこにみいだすかの問題である。ニツクリツシユにおいては、直接的關係のうちに一體化が、また、間接的關係のうちに

肢體化が理解せられている。だがこのことは、彼が一體化と肢體化とを人間存在の二重性格にもづく共同體形成の二つの方向として理解することと矛盾する。その理由を明らかにするために、われわれはまず、人間存在の二重性格と、直接的關係および間接的關係との關連を考えてみよう。さて、間接的關係は、經營の全體職分の肢體化を媒介として成立する、經營とその構成員との關係であり、また、直接的關係は、そうした職分の肢體化とは一應無關係に成立する、經營とその構成員との關係であつた。これら二つの關係は全く別のものである。そして、そのかぎりにおいて、人間存在の二重性格から、これら二つの關係を、同時に基礎づけようとする彼の見解は正しくないこととなる。けだし、人間存在の二重性格において把握せられる個體性と肢體性とは、同時的であるからである。かくて、二重性格の人間存在は、これら二つの關係のそれぞれについてか、あるいは、そのいずれか一方においてのみ、把握せられねばならないこととなる。そこで、われわれはまず、間接的關係における構成員の存在性格から検討することとしよう。第一に、ニックリッシュは、こうした關係のうちにみられる構成員を肢體的地位にある人間として、ことに最終の肢體的地位にある構成員を、彼等が技術的裝置の單なる一部分たらしめられる傾向にあるものとして特質づける。われわれは、間接的關係における構成員を、彼等がその肢體職分の擔當關係を介して、その肢體的地位における営みのみを強制せられていく人間として解することができる。こうした事態は、ことに最終の肢體的地位にあつて、作業を擔當する構成員についていわれうるのであり、彼等は、その個體性を漸次疎外せられ、肢體性のみを強制せられていく人間として特質づけられる。かくて、われわれは、間接的關係における構成員を、その個體性を疎外せられていく人間として、したがつてそれはまた、二重性格的存在としての人間ではなくなつていく意味において、人間性を疎

外せられていく人間として特質づけることができる。それゆえ、われわれは、二重性格的存在としての人間を、間接的關係のうちにみいだすことはできないのである。第二に、ニックリッシュは、間接的關係において構成員、ことに最終の肢體的地位にある構成員の共屬感の疎外を理解する。こうした事態は、經營がその構成員の手段的存在となる傾向を意味するものとして解せられうるであらう。そして、そこにもまた、人間性疎外の事態がみいだされる。ただし、經營がその構成員の手段的存在となる傾向は、構成員の個體性とその肢體性ないし經營の全體性に先行し、優先することを意味するのであり、二重性格的存在としての人間は、そこにはみいだされなくなる傾向を意味するからである。以上、これを要するに、二重性格的存在としての人間は、間接的關係のうちにはもとめられないことが明らかとなつた。ところで、これに對して、直接的關係は、間接的關係とは一應無關係に成立する、經營とその構成員との關係であつた。そして、そこにおける構成員は、機械を手段とする分業的生産の高度化によつて、その肢體性のみを強制せられていく存在ではない。のみならず、直接的關係は、構成員が共屬感を容易にかつ效果的に保持することを可能ならしめるものであつた。それゆえ、二重性格的存在としての人間を經營のうちにもとめるならば、それはまさに、直接的關係のうちにもとめられねばならないこととなる。そして、このことはまた、いわゆる一體化と肢體化とが、それゆえ個別化と全體化とが、直接的關係のうちにのみみいだされるものであることを意味する。ただし、個別化と全體化とは、經營構成員がその二重性格にもとづいて共同體を形成する行動性格に關するものとして、すなわち、個體性と肢體性とを同時的な契機とする構成員の行動性格であるものとして解せられねばならないからである。以上の解釋が正しいとすれば、人間存在の二重性格に關する直接的自己意識としての良心は、直接的關係とのみ關連

をもつのであつて、間接的關係とは無關係である。そして、それゆえに、人間存在の二重性格に關する直接的自己意識ないし良心から、直接的關係と間接的關係とを同時に基礎づけようとするニククリッシュの論理は、明らかに誤謬であることが注意せられねばならない。共同體は、いわゆる直接的關係に關してのみ理解せられうるのである。

さて、共同體に關する他の問題は、共同體と共同體化との關連に關するものである。そして、それは、ニククリッシュの共同體に關する見解の超越性に關する解釋と、これの克服の問題でもある。彼の見解の超越性は、いわゆる共同體が、歴史的・現實的經營における人間の社會生活に超越的であることに關する。ところで、こうした超越性に關しては、二つの解釋が可能であらう。

さて、第一に、ニククリッシュの見解の超越性は、彼が、經營における二重性格の人間存在ないし共同體の根據を、歴史的・現實的經營における人間の社會生活そのものうちにもとめずして、これとのかかわりもない先驗的自己意識としての良心にもとめたことに起因する。すなわち、二重性格の人間存在ないし共同體は、すでに先驗的自己意識としての良心のうちに與えられているのであり、このかぎりにおいて、經營における二重性格の人間存在ないし共同體は、現實の經營と全く無關係なものととして解せられねばならない。そして、彼は、こうした共同體の實現を、現實の經營における人間の社會生活に對して、超越的に要請するのである。ここに、ニククリッシュの見解の超越性がみられる。

超越性に關する第二の解釋は、二重性格の人間存在ないし共同體の根據である良心が、歴史的・現實的經營における人間の社會生活と無關係に把握せられたものではないとするものである。それは、ニククリッシュが、いわゆる直

接的關係を育成強化するための制度として、經營協議會制度をあげていふことと關連する。そして、こうした制度は、第一次大戰後のドイツにおける、經營民主化的志向を代表するものとして解せられる。ニックリッシュは、こうした制度をもつ現實の經營における人間の社會生活のうちに、良心を直觀したものと解せられる。こうした解釋が許されるときは、このことは、二重性格の人間存在ないし共同體の根據を、現實の經營のうちに直觀したことを意味することとなる。それゆえ、こうした解釋をとる場合、いわゆる良心は放逐せられ、第一の解釋における超越性は消滅するであらう。しかしなお、彼の見解には検討せられるべき問題がある。われわれは、これをとりあげなければならぬ。さて、ニックリッシュは、一方、二重性格の人間存在ないし共同體そのものが、ただちに、現實の經營のうちに實現せられているとは考えていないものと解する。このことは、いわゆる組織法則が現實の經營において、そのまま實現せられているということとは無關係である、とする彼の見解のうちにみられる。また、共同體としての完全な經營像を現實につくりあげることが、困難であることもみとめている。そして、それは、いわゆる直接的關係が、いかなる諸施策によつて育成せられるべきであるかは、きわめて困難な問題であることを、彼自ら承認していることと關連する。ところで、彼はこうした見解をとる場合もあるのであるが、それにもかかわらず、他方、共同體としての經營の完全な像をつくりあげようとする。このことは、彼が經營をただちに共同體として把握することのうちに、明らかにみいだされる。ところで、ニックリッシュは、彼の基本的態度としては後者をとる。そして、そこでは、いわゆる共同體としての經營は、現實の經營から超脱し、これに對して超越的にその實現を要請することとなると解せられる。ここに、第二の解釋における、ニックリッシュの見解の超越性がみられるのである。

さて、ニツクリッシュの見解の超越性に關しては、以上二つの解釋が可能であると考えられるのであるが、いずれの解釋においても、超越性の問題は克服せられえない。ところで、こうした超越性は、いかにすれば克服せられうるであろうか。この問題を考察しなければならぬ。われわれは、こうした問題に關しては、第二の解釋におけるニツクリッシュの見解を検討しなければならぬ。けだし、第二の解釋は、第一の解釋における超越性を克服するものとして解せられうるからである。

さて、われわれは第二の解釋において、ニツクリッシュが、經營協議會制度をもつ經營の社會生活のうちに、二重性格の人間存在ないし共同體を直觀し、人間存在ないし共同體としての經營の完全な像をえがくとしたことをのべた。彼のこうした見解は、人間存在ないし經營社會に關する本質觀として特質づけられるであろう。われわれは、こうした彼の見解にくみすることはできない。人間存在ないし經營社會の本質は現實の經營に超越的に、これを規定するものとしてはじめから存在するのではなくて、經營における社會生活の具體的な歴史的發展のうちに形成せられていくものとして解せられねばならない。こうした見解をとる場合、經營をただちに共同體として理解するのではなくて、現實の經營の歴史的發展のうちに本質的動向としての共同體化が把握せられねばならないこととなる。かくてまた、いわゆる直接的關係は、そこにただちに共同體そのものがみられる經營とその構成員との關係としてではなくて、共同體化が展開せられていく、現實の經營における經營とその構成員との關係として、解せられねばならないこともなる。ところで、ニツクリッシュは、いわゆる直接的關係に關する所説において、「直接的關係の育成強化」について述べる。この場合の「直接的關係」は、共同體そのものがみられる「直接的關係」から區別せられる、經營とそ

の構成員との關係であると解せられうる。そして、これを、歴史的・現實的經營における經營とその構成員との關係と解するならば、そこには、共同體化がみられることとなる。これを要するに、われわれは、經營をただちに共同體そのものとして理解するのではなくて、經營における人間の社會生活の歴史的發展うちに共同體化を把握することによつて、ニククリッシュの見解の超越性を克服することができるであらう。

第三は、ニククリッシュのいわゆる分業・協業に關する問題である。ここでは主として、製造過程における分業・協業の問題をとりあげることとしよう。すでに考察したごとく、ニククリッシュは、分業・協業を、經營労働がこれにもとづいておこなわれる形式として理解する。そこでは、根據域を構成する物質のなかで作用する一體化的・肢體化的力と、分業・協業の形式による労働とが合一すると解せられている。ところで、こうした合一が考えられるとしても、こうした事態は、それがただちに目的結果を十分に實現することと關連するものではない。けだし、ニククリッシュにおいては、人間は物質である肉體を通して根據域における諸物と結びつき、そこに上述の合一が理解せられる場合にも、なおこれに加えて、目的結果に對して十分に方向づけられた形態變化の問題があるからである。換言すれば、目的結果に對して根據域が過不足なく形成せられねばならない問題が、合一の問題のほかになお殘されているからである。ところで、表象せられた目的結果に對して、物質の形態變化を正確に方向づけ、そうした方向において一體化的・肢體化的力を用せしめるためには、精密な計算にもとづいて、根據域が全體・部分の關係において存在するよう、その形成がおこなわれねばならない。こうした形成を可能ならしめるものこそ、自然科学にもとづいて組立てられた技術であり、その進歩であると解せられる。そして、根據域のこうした形成への努力の方向と關連して、

機械を手段とする分業的生産の高度化が理解せられうるであろう。しかも、そこでは、機械が人間労働にとつて代る傾向がみられる。つまり、機械を手段とする分業的生産の高度化は、こうした傾向をそのうちに包含するわけである。ニックリッシュが、一方において、分業・協業を、作業がそれにもとづいておこなわれる形式として解するにもかかわらず、他方、分業の發展ないし高度化についてのべる場合、それは、機械を手段とする分業的生産の高度化を意味するものとして解せられねばならないであろう。ところで、こうした分業の高度化においては、根據域を支配する原理は、ますます物質の存在原理となるであろう。すなわち、全體・部分の關係における存在原理となるであろう。ここでは、人間は目的の選擇の餘地を次第にせばめられ、ますますその地位における營みのみを強制せられることとなる。すなわち、人間の個體性の疎外、したがつて、人間性の疎外がみられることとなる。そして、共同體が分業と均衡的に發展せしめられない場合、根據域における人間は根據域、ことに技術的裝置の一部分にすぎなくなり、物質の因果關係の作用の鎖につながれることとなる、とするニックリッシュの見解は、それがこのような事態を意味するものと解することによつて明らかとなるであろう。

さて、第四の問題は共同體化と分業的生産の高度化との關連に關する。ニックリッシュは、いわゆる分業の高度化による人間性の疎外に關して、構成員、ことに最終の肢體的地位にある構成員の共屬感の疎外をもふくむ二つの事態を理解し、分業と共同體との均衡的發展を主張する。こうした主張は、機械を手段とする分業的生産の高度化と共同體化との均衡的發展を意味するものと解せられねばならないであろう。

六 結

以上、われわれは、ニッケリッシュの所論を考察し、これを批判的に検討した。そして、機械を手段とする分業的生産の高度化と、共同體化との均衡的發展を理解した。こうした發展のうちにこそ、經營構成員が經營の具體的な擔い手ないし主體となる傾向がみられ、これによつて、持續的な生産的氣分にみちた經營勞働が可能となるであらう。かくて、兩者の均衡的發展のうちにのみ、ニッケリッシュのいわゆる經營の生活力ないし生活能力の増大がみられることとなるのである。